

《西行桜》―花の友と惜しむ春―

相山女学園大学教授 飯塚 恵理人

廣田鑑賞会で廣田幸稔師が《西行桜》を初演される。この機会に《西行桜》について先学に導かれつつ私なりに考えてみた。

《西行桜》の構造

《西行桜》は平安く鎌倉時代の歌人、西行の「花見」と 群れつつ人の来るのみぞ あたら桜の とがにはありける」の和歌（山家集上 春 注）を典拠とした世阿弥作の能である。伊藤正義氏^{注三}は、「あたら桜の」の和歌と同じ「桜の咎」の語を含む『夢窓国師御詠草』の和歌と《葛城》、西行の和歌と《江口》の関係から、世阿弥が「夢中の翁」の名と《西行桜》の「問答」の想を得たこともあり得ると指摘している。《西行桜》は、西行と夢窓国師の和歌から「桜花はどう眺めるべきか」という問いを導く。そしてクライマックスのワキ西行とシテ老木の桜の精との夜遊において、老木の桜の精は尊い僧である西行との出会いを成仏への機縁として感謝すると共に、「桜花は西行のような風雅な友人と見るべきもの」であるとして問いに対する答えとし、「春の夜のひと時を惜しむ(惜春)」というメインテーマへ繋ぐ構造を持っている。

西山に庵する西行

《西行桜》では、西山に西行の庵があるとされている。出家した西行が西山に住んだという伝承は、西行の一生を説話化した『西行物語』^{注三}

にあり、ここで「あたら桜の」の和歌を詠んだとしている。しかし『西行物語』の別本である『西行一生涯草子』^{注四}には西行が西山に住んだとは書かれていない。世阿弥が何を参考にして《西行桜》を創作したのか確定することは難しいが、『西行物語』ないしはそれを元とした本や伝承は一つの有力候補であろう。『西行物語』では、花見に来た人々は「昔の友」である。これに対して『西行桜』のワキツレ花見の男達はただ桜花を見るのが好きな上京（上掛系）では「下京」^{注五}の住人で、西行の昔の友ではない。その点では『山家集』の「あたら桜の」の和歌の詞書に「しづかならんと思ひける頃、花見に人々まうで来たりければ」とある、西行との関係が示されないただの人々とも見なせる。しかしワキツレは西行に「これまでではるばる来たりたる心ざし」を認められて花見を許される。彼らは西行に風雅な「花の友」と認められたのである。江戸時代初期の舞台の所作を著した『中村正辰仕舞付』^{注五}には、「夜とともにながめあかさん」と云時、花見の衆、地謡の方へなをる。」とある。この頃のワキツレは退場せず桜を眺める所作をし、風雅な人々であると受け取られていたことが分かる。

和歌的に解釈する《西行桜》

『幸正能口伝書』^{注六}に「第九、述懐の心。藤戸・ぬれ衣・はし立・西行桜。何もしゆつくわひのかたを心がげよ」とある。「しゆつく

わい」＝「述懐」は和歌の歌題の一つであり、「無常・懐旧題に比して告白を基盤に据えた歌題。作例は、①不遇沈淪を焦躁するもの、②老を嘆くもの、③仏教思想の浸透により無常を嘆くもの、④述懐の気分象徴化を企てたものなどに分類できる」^{注七}とする。幸正能は《西行桜》を述懐の和歌を解釈するように捉えていた。この作例に従って分析すると、まず《西行桜》には、①「不遇沈淪を焦躁する」態度は見られない。洋々たる前途と愛する家族を捨てて出家した西行には、いまさらそのような感情が湧くはずがないからであろう。逆に②「老を嘆く」態度はシテ老木の桜の精に見られる。しかし老いを歎きつつも積極的に極楽浄土への往生を願う、西行との出会いでそれがかなえられそうであるという点で、③「無常を嘆く」だけではない強さと明るさがあり、それが曲の特色ともなっている。

面・装束について

廣田幸稔師が《西行桜》のシテを勤められるのは今回が初めてであると伺っているが、廣田鑑賞会では幸稔師の父上の陸一師が昭和五十七年にシテを勤めていらっしやる。この時の装束が「面は石王尉、装束は黒風折烏帽子、厚板、色大口、単狩衣、腰帯、扇、白垂であった」と、幸稔師に教えて戴いた。シテの装束については、室町時代後期から桃山時代にはほぼ現代に繋がる定型が出来上がっていたようで、『金春安照装束付』には「面、石王兵衛。だみゑぼし。白きたれ。金らんの八巻。狩衣。大口」^{注八}「百十番本」^{注九}や「面、石王兵衛。金風折。白垂。金らんの鉢巻。狩衣。大口。腰帯。扇。(中略)西行、白衣・水衣・腰帯・扇指。数珠」^{百十二番本} ^{注九}

とある。「だみゑぼし」と「金風折」が両本で異なり、陸一師がかけられた黒風折烏帽子は華やかさを抑えている意味で「だみゑぼし」に近い解釈と思われる。また百二十二番本にはワキ西行の装束も載っている。この装束は着流し僧の姿であり、金春安照が西行を「諸国一見の僧」と同じ粗末な衣の修行僧と理解している点で注目される。

《西行桜》について先学に導かれつつ、まともでないが述べてきた。老木の桜の精と桜を愛する西行の心の交流を廣田幸稔師がどのように表現してくださるか。金剛流の《西行桜》を拝見するのは初めてなので、還暦を迎える私の「老い」の楽しみにしたい。

注

- 一 『山家集』後藤重郎校注、新潮日本古典集成、新潮社、二〇一五年四月発行、三二頁
- 二 『謡曲集』中伊藤正義校注、新潮日本古典集成、新潮社、一九八六年三月発行、四四一頁。《西行桜》の本文は七九、八九頁に拠った。
- 三 『西行物語』高橋貞一編、文芸文庫日本古典文学、勉誠社、一九八三年四月発行、一一一―一二四頁
- 四 注三、二二頁
- 五 『金春安照型付集』小田幸子校訂、法政大学能楽研究所編、能楽資料集成14、わんや書店、一九八四年二月発行、一九三頁
- 六 『幸正能口伝書』竹本幹夫校訂、法政大学能楽研究所編、能楽資料集成13、わんや書店、一九八四年三月発行、一五五頁
- 七 『和歌大辞典』犬養廉他編、明治書院、一九八六年三月発行、四七五頁中段、項目執筆滝沢貞夫

八 注五、二七頁

九 注五、五七頁